



バラ園を歩く4

毎月1回、道内のバラ園を訪れて、その魅力を探ります。

白い恋人パーク・ローズガーデン

イングリッシュ ローズを中心とした各種のバラが見られる

☎011・666・1481

札幌市西区宮の沢2条2丁目

ガーデンプランナー ● 工藤敏博

● 調和のとれたバラ園

「白い恋人パーク」は、石屋製菓が経営するチョコレート博物館、ショップ、レストラン・カフェのほか、コンサドーレ札幌関連施設を含めたエリアの総称である。ローズガーデンは中世英国風のチュダーハウスの北西にあり、中庭的な位置づけになっている。

隣接するサッカー練習場側のフェンスには、四季咲きのつるバラ約20品種、70株が植えられている。一番花が一斉に開花する時には各色の花で覆われ、見事な景観をなしている。

チュダーハウスや屋外入り口から庭に入ると、華やかなバラが咲き乱れるサンクンガーデン(地面より低く造られた庭園)が目の前に現れ、初めて訪れる人は驚きの声を上げる。決して広くはないが、ちょうど視界にまとまる広さであり、逆に強いインパクトを与える。

イングリッシュローズを中心とした約100品種、400株で構成され、株元にはヘレボルスが下草として利用されている。園路で分けられた各区画は同系の色ごとに構成されるが、淡い色彩のイングリッシュローズ主体の構成は、おのずと調和が保たれている。

● 品種選びの参考になる

観光客が主体となっている施設の特徴として、春から秋まで常に開花していることが求められる。それを、園路で小分けにされた決して広くない植床で実現するために、ポット植えにした開花株の入れ替えをしていくという手

法を取っている。

400株のうち地植えは100株程度で、残りはポットごと植え込まれた株である。四季咲き性で矮性品種というコンセプトは明確で、一般家庭の品種選択にはたいへん参考になる。

現在は4年目だが、ポット植えは老化が早いとみられ、今後は生育を見極めての株の更新が図られることになる。大株に育ち過ぎた一部の地植え品種の見直しも、検討されている。イングリッシュローズに限らず、コンセプトにかなうより広範囲のブッシュローズからの選択が進むことを期待したい。花卉一枚落とさない毎日の花がら取りが徹底されている。特に高温期において

いては病害回避につながり、家庭でも見習いたいものである。

一季咲きのガリカローズやアルパローズなどのオールドローズの導入も検討されているが、アメリカカンピラーやポールズヒマラヤンムスクを絡ませた中央部の高さのあるピラーや随所で利用されているつるバラも含めて、全面的な四季咲き品種の利用も可能だろう。

ほぼ三面を囲う建物により、冬の寒風から守られている、札幌市内でも希有な好環境と手厚い管理環境を生かして、四季咲きのコンセプトに徹してほしい。いつ訪れても花園であるべき施設なのだから。



コーデリア Cordelia
イングリッシュローズ。ピンクの濃淡が美しい。アルパローズの特徴が見られる品種



アイスバーグ Iceberg
フロリバンダローズ。強健で花つきよい。20世紀を代表する品種。別名シュネービッチェン



L.D.ブレスウェイト L.D. Braithwaite
イングリッシュローズ。「赤色のイングリッシュローズの中では最高傑作」とされる品種



ルイズ クレメンツ Louise Clements
シュラブローズ。アメリカ生まれのイングリッシュローズと云ってよい品種